

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

林京子『予定時間』論

著者	熊 芳
出版者	法政大学国際文化学部
雑誌名	異文化．論文編
巻	17
ページ	157-181
発行年	2016-04-01
URL	http://hdl.handle.net/10114/12669

〔論文〕

林京子『予定時間』論

国際文化研究科博士課程

熊 芳

YUU Hou

はじめに

林京子は上海を素材にして三つの長篇小説を書いた。単行本発行の時間順で挙げれば、それぞれ『ミッシェルの口紅』¹（一九八〇）、『上海』²（一九八三）、『予定時間』³（一九九八）となる。前の二作は、戦時下における幼児期から少女期のおよそ十四年間の上海生活、戦後三十六年ぶりの上海再訪の体験に基づいて書かれた、私小説の形で語る林京子の創作スタイルに一貫した自伝的な作品である。ところが、最後の一作は、林京子の通常の創作手法と異なり、アジア・太平洋戦争中、新聞記者として二回も上海に渡り、敗戦後もそこにしばらくいた男性主人公「わたし」が老後、自分の上海体験を回想的に物語ったものである。この意味で、上海を題材とした創作において異彩を放つ『予定時間』は、林京子の文学を考える上で注目に値する作品と言えるだろう。

『予定時間』を『群像』に発表した直後、川村湊が「軍国主義の立場からも、反日主義の立場からも、等距離的にバランスのとれた日本人記者が、上海での見聞や従軍記者として体験したことを声高になることなく、坦々と語り続ける（実在のモデルがいそうだが）。戦中の、いわば普通の人が見て、体験した上海や中国がそこには描かれていて、軍国主義や植民地主義の貴重な証言となっているのだが、やや『予定調和』的な構成になっていて、主人公の優等生ぶりに物足りなさを感じ

じた」⁴と評している。

この評論を読んで、いくつかの疑問が浮かんた。作品における優等生ぶりの実在のモデルとはどのような人物なのか、武田泰淳や堀田善衛をはじめとする大勢の文学者によって戦時下の上海生活が数多くの小説にすでに描かれたものの、なぜ林京子はやや「予定調和」的な構成で新聞記者の上海生活を書くことにしたのか。林京子の通常の創作からさらに、なぜこれまでの創作に登場させなかった男性を主人公にしたのか、すでに少女の視点から戦時上海の生活を語ったにも関わらず、大人の視点からもう一度上海の生活を描く理由はいかなるものだろうか。作品にどのような上海、あるいは上海生活が描き出されたのか、新聞記者の上海生活を描くことによって作者は何を伝えたいのか、等々疑問に思う。

以上の問題意識から生まれたのが本稿である。これらの「謎」を解くために、主人公と登場人物リタ、作品の成立、物語の展開について詳細な考察・検討を試みたい。

一 主人公とリタ

『予定時間』の主人公＝語り手は、林京子の文学における主人公の設定手法と異なり、作家本人と重なる「わたし」でも「女」でもない人物である。『群像』に発表する前、新作『予定時間』をめぐるインタビューで林京子は、主人公の新聞記者のことに触れた後、「もうひとつそれにまつわって一人の女性がいて、それも実在された方」⁵と登場人物の女性リタに言及した。つまり、作中人物の新聞記者とリタは、いずれも、実在のモデルが存在するのである。

「別れた夫とおぼしき人物をモデルとした」⁶、「戦時下の上海で新聞記者をしていた別れた夫の上海時代を投影させた」⁷と、新聞記者のモデルが林京子の別れた夫・林俊夫であることはすでに指摘されている。小説からも主人公のモデルを判別する手がかりを掴むことがで

きる。

「わたしが日本の敗戦を知ったのは、一九四五年、昭和二十年八月の五日ごろである」⁸（二九三頁）、「昭和十二年の七月七日に盧溝橋で起きた日本軍と中国軍の武力衝突」（三〇三頁）と、作中の出来事の時間を歴史事件の時間と対照すると、小説は具体的な事実に基づいて書かれていることが分かる。一九〇九年に生まれた林俊夫は一九三六（昭和十一）年で二十七歳になることは、作品の内容「昭和十一年の——わたしが二十七歳の年」（二九六頁）と合致している。

「夫は——彼も戦時は朝日新聞の記者として上海にいたらしいのですが——、その上海時代に室伏クララさんという才女と付き合っていたこともあり、どうもものを書いたりする女性が好きだったようです。」⁹という林京子の語りからわかるように、林俊夫は、戦中朝日新聞の記者として上海に渡り、上海時代に才女と交際していた。林俊夫と同じくアジア・太平洋戦争で日本が敗戦後、中国国民党宣伝部対日文化工作委員会に徴用された堀田善衛が、後年『上海にて』¹⁰、『堀田善衛 上海日記：滬上天下一九四五』¹¹の中で戦中・戦後上海にいた林俊夫と室伏クララのことに言及している。日記には二人揃っての記述が多く、当時は恋人関係、厳密に言えば、クララは既婚者の林俊夫の愛人らしい。日常身の出来事を記している堀田善衛の『上海日記』から林俊夫と室伏クララの具体像ははっきり読み取れないが、幾つかの記述¹²は『予定時間』の中の「わたし」と一致している。一つ目は二人は虹口あたりに住んでいること。二つ目は一九四五年八月に痩せた身体を持つ林俊夫が上海にいて、元海軍嘱託、朝日新聞記者であること。

一九八三年五月に『文学的立場』に「NANKING 1940・秋」という短篇が発表された。この小説には、林京子自身が「女」、林俊夫が「男」、室伏クララが姓名のイニシャル「C・M」として登場している。林俊夫が誠実に室伏クララを愛していたことは小説から読み取れる。恐ら

く林俊夫の口から、それに書類や手記などの資料からだろうが、林俊夫と別れておよそ十年経った創作時点で、林京子はすでに林俊夫と室伏クララが愛人関係にあった過去を知ることができた。林京子が結婚と離婚の生活を真正面から扱った『谷間』（一九八六）の中の表題作「谷間」では、林京子、林俊夫、室伏クララがそれぞれ作中人物のなつこ、草男、C・Mのモデルに該当する。作品において、主人公のなつこは、草男の戦中・戦後の上海生活、草男との出会いから結婚、そして離婚に至る話を織り交ぜて、林俊夫の過去について詳細に語っている。なつこの語りから、草男が一九三八年に大東亜共栄の国策に沿って設けられた東亜部の新米記者として上海に渡り、そこでC・Mと愛人関係になったことが分かる。したがって、「谷間」の草男とC・Mを、『予定時間』の主人公「わたし」とリタとして再度登場させたと推定できる。

「＜資料紹介＞室伏クララのために」の中で、「草野心平や堀田善衛らと関わりを持った女性＝室伏クララ（一九一八～一九四七）とおぼしき人物を登場させた小説」¹³は林京子の『予定時間』であると大橋毅彦は書いている。作中のリタのプロフィールを追っていくと、「評論家およびジャーナリストとして数多くの著作を持つ室伏高信の娘で、中国語に関する才能を生かし、その方面での訳業でも一定の仕事を残した室伏クララのイメージを、ごく自然に思い浮かべるのではないか」¹⁴と小説のモデルを想起した経緯を大橋は述べている。大橋が思い浮かべた室伏クララのイメージは、『予定時間』のリタと数多くの類似点を持っている。

室伏クララは、第一次世界大戦から第二次世界大戦にかけて活躍したりベラル派の評論家・室伏高信の娘で、現代中国文学の翻訳および研究に携わり、三十歳前後の若さで上海で客死した。父親ほど有名ではないが、敗戦前後上海で一時期過ごした日本人作家の作品や日記類によく出てくる名前なので、恐らく当時の上海にいた日本の文化人の間ではよく知られていた存在だろう。『追放記——人生逍遙——』の

中で、娘の病死を知った室伏高信は、その短い生涯を顧みている。その中でクララの上海行きについて次のように回想している。

彼女が上海に出かけたのは、三年前の十月であった。まだ二十二歳の若さでもあるし、肋膜炎を疾んでいるうえに、蒲柳の質である彼女を、気候も悪く、また一種の暗黒面をもっているこの世界都市に、ひとりで出してやるのは、たしかに一つの冒険であるとは思ったが、彼女がたつての希望であるので、思いきって、彼女の希望にそうことにしたのであった。¹⁵

一九四〇年の上海行きは、クララの希望に沿うことだと言っていたが、中国語の教師との不倫関係を切斷させるのが娘を日本から外へ送り出した所以である。¹⁶

父親の筆から見えた娘クララは、気まぐれ、かつわがままな性格の持ち主だが、中国語の勉強、中国文学の翻訳・研究に興味を持っている¹⁷。「数えて見ると、彼女は二十五歳になっている。もう立派に一人前の女になっているわけであり、彼女の荒んだ生活ぶりは、かねて耳にしているところであるし、またその噂が真実であるに違いないのであるが、(略)彼女は憂鬱なほど素直で、物やさしくて、一抹の寂しさをもっていることは、いつものとおりであった」¹⁸とクララの男女関係、性格を回想から窺い知ることができる。

『予定時間』の中で、はじめての特派員時代、「わたし」が従軍先で日本人の女性リタと知り合いになったが、後に愛人関係にたどり着くまで、リタの恋人は海軍大尉、軍医、中国人の黄氏とどんどん変わっていったことが書かれている。リタは、「わたし」の所属先のZ社の上司から見れば「カルメンのような女」、将校の言葉を借りれば「危険とゼントルマンが好みのような女」。一方、「わたし」はリタのことを「己の心に忠実な女である。人の好き嫌いが激しく、誇りが高い。頭

脳明晰で、学者の家で育った、日常生活のなかで身につけた知識と見識だから、一夜漬けの学士さまたちは、たいがい負ける」(三五九頁)と見て、「国のために体を売り、命を犠牲することまで頑張っていた」リタが噂されて可哀想だと弁明している。作中のリタに対する評価は、男女関係においては見方によって違うかもしれないが、頭脳聡明、中国語堪能である点においては、まさに室伏クララのような「才女」であるといえよう。

『予定時間』以前の林京子の創作における林俊夫とおぼしき人物のイメージは、マイナスの方が多く感じられる。『父のいる谷』(一九八二)に登場する男は、義理の父親の看病もせず、葬式に出席もせず、妻が父親を世話するため長崎へ行っている間、他の女を家まで呼び寄せる人物である。「谷間」の中で、結婚前草男の母親から「草男とささとの関係は実の妹でありながら並みの兄妹ではない」と手紙まで寄せられ、結婚後もささの娘の口から「叔父である草男とは男と女の関係だ」と告白された。証言と推測の間で疑心暗鬼になって苦しんでいたなつこは、草男本人が男女関係の「噂」を否定しているにも関わらず、「誇りを守る唯一の残された道」——離婚を選択した、と林京子が林俊夫との出逢いから結婚、離婚までの経緯を作品に投影させている。「谷間」をはじめとする多くの作品から受けたイメージは、草男の義理の母親の言葉を借りれば「女たらし」、作者の語りで「母親の観察の的確さを、後日なつこは知りました。あの方は女たらし、これはいささか違う。まめ人、時々誠実なのです」¹⁹。したがって、『予定時間』において、作者林京子は、今までの別れた夫のイメージを負から正へと一変させた、川村の言葉を借りれば「優等生ぶり」の人物像を作り上げた。それでは、なぜ『予定時間』で林俊夫のイメージを好転させたのか、さらにその上海時代の愛人だったクララを登場させたのか、疑問になる。これらの疑問に対する回答は作品成立につながるため、次節に譲ることにする。

二 作品成立

長篇は、前章、一～十四、終章の十六章からなっており、晩年を迎えた元新聞記者「わたし」の、三十代の新聞記者としてのアジア・太平洋戦争の戦中生活、および日本が敗戦後しばらく上海で捕虜として国民政府中央宣伝部の対日工作委員会で「技術雇用日僑」として働く日々を回想記の形で、自らの生きた過去を検証しようとしていく語りによって筋が展開されていく。回想の対象となる時期は、主に第一回の特派員として上海に赴任した一九三八年八月の末から帰国する一九四八年十二月までとなり、そのなかで上海の生活期間は、新聞社の特派命令を受けていた一回目の一九三八年から一九四〇年まで、および翻訳した原稿が共産側のスパイに渡された事件に巻き込まれたため、日本の憲兵隊の監視・搜索から逃れ、再び上海へ行った一九四二年から戦後の一九四八年までである。

『予定時間』の前章の冒頭に、主人公＝語り手の「わたし」による執筆の動機が次のように語られている。

わたしが日本の敗戦を知ったのは、一九四五年、昭和二十年八月の五日ごろである。上海にある、中国人が経営する中国語新聞社が、ソ連が発表した“日本ポツダム宣言を受諾”というニュースを傍受。二日後の七日に中央日報——中国国民党機関紙——が号外を出した。

日本の敗戦を知った一部の中国人たちは街に出て、勝利の歓声をあげ、爆竹を鳴らして乱舞した。

彼らの狂喜する姿を、わたしは南京路にあるマンションの窓から、昨日まで戦勝者の立場から報道を続けてきた日本人記者として、眺めていた。

あのころから半世紀がすぎた。この一万八千余日にわたる時は、わたしの手許から、ほとんどの記録を消失させた。これから記し

ていくことにも、思い違いがあるかもしれない。過ぎ去った時にかかわった友人、知己の多くの者も、この世を去った。訊ね、ただすすべもない。

しかし、こうして机に向かっていると、過ぎた時への記憶が、ふつつつと甦ってくる。多感だった青年期、母国のために、信じてペンをもった血気盛んな三十代の記者生活。

前期は、ほとぼしる命の炎のままに、後期には学んだ知識と、わたしが信じた東亜共栄の理想と、わたしの「性根」を求めて。
(二九三頁)

主人公「わたし」による執筆動機は、戦中・戦後の上海に居合わせた日本人の「血気盛んな三十代の記者生活」を記録したいという願望とされる。以下、主人公の執筆動機と他の資料を参照しながら、作者林京子の創作動機を探ってみたい。

まず、年代順に考えてみる。一九九八年に『予定時間』が刊行されるまで、林京子は、一九五一年に林俊夫と結婚して一九七四年に離婚に至った。一九八〇年に『ミッシェルの口紅』を書き、一九八一年に戦後はじめて再び上海の土を踏んだ五日間のツアーで帰国後、旅行記を基に一九八三年に『上海』を発表した。『ミッシェルの口紅』で戦争の陰に脅えながらも、個人にとって楽しく幸せだった少女期を描き、『上海』で少女時代の延長線に想定された原点探しの旅を計画しながら、結果的には昔の上海と異なる新しい上海の実相に直面させられたことが告白されていた。一九九六年七月に上海第一高女の同級生三人と、四日間にわたって、戦後二回目の上海訪問を果たした。林京子の上海再訪と文学創作を照合すると、一回目の上海再訪で新旧上海の落差を知らされた感情を『上海』で綴り、『上海』の創作中あるいは創作後、自分にとっての上海とは一体何であったのかを考え直した。二回目の再訪は、林京子にとって、上海の歴史、ひいては日中間の歴史

を真正面から見据える契機となっただろう。一九九六年九月にエッセイ「『上海租界』は誰のものだったか」が発表され、一九九八年六月に長篇『予定時間』が世に問われたのはまさにその実りである。

つぎに、内容について考えてみる。「太古の昔から文化的にも経済的にも密接な関係にあった中国へは、多くの日本人が深い関心を寄せ続け、またその『夢』を託してきたのも事実である」²⁰と黒古一夫が論じているように、上海を題材に小説を書いた明治以降の文学者に限っても、『上海紀行』（一八九八）の永井荷風、『魔都』（一九二四）の村松梢風、『支那遊記』（一九二五）の芥川龍之介、『上海』（一九二八）の横光利一、『支那雑記』（一九四一）の佐藤春夫、『蝮のすゑ』（一九四八）の武田泰淳、『祖国喪失』（一九五〇）の堀田善衛、等々よく知られた名を挙げられる。「上海在住の居留民を題材にした『予定時間』は、時代と国家のなかで消えていった人たちの、救済のつもりで書いた小説である。あの時代を、庶民レベルの大東亜共栄を理想として生きた個人が、上海には沢山いた」（四六五頁）と林京子自身が言っているように、作品の主人公「わたし」は単なる新聞記者という一人の存在だけではなく、戦時下に上海に居合わせた知識人や記者という多数の存在を代表している。「創作の原点でもあった上海、つまり戦争が林京子の内部で癒されない宿痼として存在し続けていたが故に、体験レベルだけではなく、客観的に上海＝戦争を捉えたいという欲求を抑えることができなかったのである」²¹と指摘されているように、個人の少女期の体験に止まらず、大人の視点で距離を置いて戦時上海を書き残した林京子の、作品を「私」から「公」へと広げていく姿勢も創作の理由として考えられる。

戦中の上海体験と被爆体験をともに経験し、そこを基点に戦争の全体や中国と日本の関係を見渡せるようになった林京子にとって、いかに戦前の日本帝国主義が唱えていた「大東亜共栄」が建前でしかなかったかは、身をもって知ることができたはずである。戦後文学者として

の林京子は、とくに幼児期から少女期の長い年月をわたる自分の記憶、二十三年間もともに生活していた別れた夫の「血気盛んな三十代」の新聞記者として見た戦争の真実、さらに広めて言えばアジア・太平洋戦争の戦中・戦後を生きた、子供であろうと、大人であろうと、一つの時代の人間の記憶と深く関わりを持つ国際都市上海を作家的な眼差しを取って、もう一度見つめたかったがゆえに、武田泰淳や堀田善衛と同世代と言っている男性の新聞記者を主人公＝語り手とした小説を書いたのだろう。

「被爆体験を基にした作品が、林京子の現在に至る生の全体を検証する目的で書かれたように、『別れた夫』との生活もその夫の精神の在り方に踏み込むことによって、上海を基点とする自分と『別れた夫』との関係を今一度考え直してみようとした」²² ことも創作動機として挙げられる。作品から見た作者と別れた夫との関係について、「林俊夫をモデルとした男性主人公の一人称小説で、林京子が新聞記者としての林俊夫に輝きを当てたかった心情の読み取れる作品である。林京子の俊夫への愛情表現の作品になっている」²³ との見解が示されている。

インタビューで林京子は次のように別れた夫のことに触れている。「夫だった林俊夫が早稲田出身なのです。『文芸首都』を主宰していた保高德蔵さんは早稲田出身ですね。夫があの人誌はいいから、勉強する気があるなら入りなさいと言って、当時店頭で販売していた『文芸首都』を買ってきてくれたのです」²⁴。もともと文学少女ではなかった林京子が『文芸首都』という場を選んで、書き始めるようになったきっかけは別れた夫の助言だったのである。

別れた主人が日常的に私に言っていたことは、「第一義をとりなさい」ということでした。ある時、同窓会に行きたいけど着る洋服がないから行けない、と彼に言ったんですね。そうしたら彼が「君はお友達に会いたいの？それとも洋服を見せに行きたい

の？」と聞いてきた。私は本当は洋服を見せに行きたかったのかもしれないけど（笑）、「お友達に会いたい」と答えました。

そうしましたら、「じゃあ第一義をとりなさい。第一義を決めたら、あとの不要なものは捨てなさい」と言ったんですね。以後、私の生き方の基本になっています。

（中略）自分は一番何をしたいのだろう、と考えた時に、見えてくるものがある。それは本当のものだと思います。²⁵

このインタビューは二〇一一年に行われているが、早稲田出身である別れた夫の「第一義をとりなさい」という言葉を念頭に置いて、自分の生き方の基本にしている林京子は、日常的に別れた夫から影響されていることが分かり、二十三年に及ぶ結婚生活は彼女にとって大事な時間であったと言える。ゆえに、「谷間」などの作品に作り上げられた「女たらし」のような男女関係の悪いイメージから一変して、林俊夫をモデルにした『予定時間』の主人公は、アジアの行く末に関心を持ち続け、恋人リタを真剣に忠実に愛し、正義感を持つ人物として登場させた。この人物像には、一九九八年、米寿も超えた林俊夫に、元妻として別れた夫と和解を求める心境が込められていると思われる。

また、戦時中上海で林俊夫と恋仲だった室伏クララについて、『堀田善衛上海日記：滬上天下一九四五』の最後に付された林京子の特別寄稿『華やかなうたげ』で、「室伏クララという記者は『シナ』を愛し、中国人よりも北京語が美しい、といわれた才女である。『濁っている、それでいて澄んでいる』と正當に『シナ』を評価できる女性で、草野心平は、彼女の詩の才能を高く評価していた」²⁶と書いた。この「才女」のイメージは、「NANKING 1940・秋」、「谷間」の中で少々触れたが、『予定時間』で主人公の次に重要というほど、多くの筆を通してより詳細に描かれている。つまり、林俊夫像と異なり、林京子の文学における室伏クララ像はほぼ変わらぬまま一貫しているといえる。

離婚して二十四年、別れた夫が天寿を全うする四年前の一九九八年、中年の息子と十三歳の孫を持ち、戦後二度も上海を再訪問した林京子は、室伏クララを含めた林俊夫の上海時代という過去を直視する際、作家として、林俊夫のことを別れた夫ではなく、一人の人間として客観的に見られるようになったと言える。それこそ『予定時間』の主人公を林俊夫とおぼしき人物に設定した所以である。

三 夢とすり替えの論理

『予定時間』の中では、上海の租界を舞台に、新聞記者である主人公の目から見た時代と戦争が語られている。『ミッシェルの口紅』と『上海』を読めば分かるように、作品の舞台となった上海の風景や人々の暮らしには、作者自身の体験が反映されている。ところが、『予定時間』の「わたし」の生活体験自体は、「少女」としての林京子の上海体験とは全く別次元のものであり、あくまでも「大人」としての上海体験である。とはいえ、その生活表象の裏に作者はその思想や感性を寄託している。したがって、「わたし」がいかなる上海体験をしてきたのか解明することは、林京子は、何を伝えようとしているのかという問いにつながるはずである。

新聞記者としての第一回の上海特派から、第二回の上海渡航、そして戦後の「技術雇用日僑」としての生活をめぐって、「わたし」と関係のある主要な政治的・社会的事件を作品から抽出し、時間順に整理すると、以下のようになる。

年	月	小説（フィクション）	歴史的な事実	章
一九三七	八	九日に上海陸戦隊の大山勇夫大尉射殺事件（この事件をきっかけに上海は戦火に包まれる）	大山事件（九日夕刻に起こった、上海海軍特別陸戦隊中隊長の大山勇夫海軍中尉と斎藤興蔵一等水兵が殺害された事件）	一
	十二	「上海軍当局」の報道によれば、十三日夕刻、南京陥落	南京攻略戦。十三日、南京城陥落。日本軍が南京城内へ入城	二

一九三八	八	Z社から最初の特派の命令を受けて上海に赴任		一
一九三九	十	従軍命令に従い、江蘇省高郵県地方に従軍		三
一九四〇	八	帰社命令により帰国、大阪本社の一部社員に東京転勤が命ぜられ、東京の亜細亜担当部員となる		六
一九四一	十二	八日の早朝、「大東亜戦争」突発の電報を東京で受け取る	八日、「大東亜戦争」開戦	六
一九四二	二	Z社の退社していた先輩に頼まれ、翻訳して渡していた原稿が、共産側のスパイに渡されていたことを知らされる。十七日、Z社の出向社員として再度上海に赴任し、海軍「支那方面艦隊報道部嘱託」を兼任		六～七
一九四四	三	日本と「支那」(重慶国民政府)との「和平談判」の動きが生じ、平和の可能性の有無に関する打診に対して「不可能」を主張		十
一九四五	一	海軍艦隊報道部長のM大佐より日本が勝利の希望を持たず、帰国の最後通告が出される		十一
	八	五日、中国の新聞社は日本がポツダム宣言を受諾したというニュースを入手。「号外を出す」と中国人の記者たちは、わたしに迫ってくる 十五日、「玉音放送」が上海に流される	十五日、昭和天皇が「玉音放送」によって、日本政府がポツダム宣言の受諾を連合国側に通告したことを、日本国民に放送を通じて公表	十二
	十一	帰国第一便の乗船が決まったが、中国側の検査官に下船を命じられ、国民政府中央宣伝部対日工作委員会の技術雇用日僑となる		十三
一九四八	十二	日本内地から最後の引き揚げ船「橘丸」で帰国		

昭和史や日中戦争に関する出来事が、「わたし」の回想と混じってしばしば叙述されている。自分が考えた日本とアジア、中国、各民族が同列に並ぶ連帯の思想、いわゆる「大東亜共栄」という夢を持って、主人公は一九三八年八月の末に最初の上海特派の命令に従い、上海へ赴任した。最初の上海体験については、次のように語っている。

乙社の規定には、特派員は一年のうちに最低限三カ月は、従軍しなければならないとある。もちろん戦争中のことだが。従軍は死の覚悟がいる。(中略) それに国際都市上海は、隠微な魅力と背中あわせに、抗日テロリストの巣である。(中略)

大山大尉の射殺事件をきっかけにして、上海は戦火に包まれた。それから一年後の特派命令である。真鍮の葉莢と、日本海軍の陸戦隊兵士や、中国第十九路軍の血を吸う激戦の跡へ出ていくわたしの気持も、重いのである。(三〇二—三〇三頁)

戦時下の「東亜新秩序」を信じて、奮闘していた日本人は少なからずいた。その人たちの中に「わたし」がいて、「わたし」の上海体験は「個人」で終わらず、東亜新秩序の建設に協力すべく渡航した当時の日本人たちまで及んでいる。「わたし」は「少くも十年はその地に在って骨を埋める気で渡航しなければ、東亜新秩序の大望は果たされない。」(三〇三頁)と深く信じていた。

第一回の特派員時代、狙われる危険を冒して、時を争う取材に往来していた「わたし」は、中国人民衆の顔と生活にぶつかる機会を得た。ぶつかり合いの中で、「わたし」に考えさせられたのは「わたしがみている風景は、貧しさ以前の中国の人びとの姿だった。わたしは共に栄える『大東亜共栄』の夢を抱いて、従軍の記を書き送るつもりで上海へやってきたのである。が、中国人と日本人との思いの間にある落差は、大きすぎる。残念なことにわたしは、芥川が辿った文学の道を、

硝煙と血の匂いを嗅ぎながら侵略者として、辿らなければならないのである。日本内地で報道され、信じてもいた『大東亜共栄』の理想は、どこかですり換えられていた」(三〇六一三〇七頁)。

作中に数回も「すり換え」という言葉で「わたし」の夢と現実との関係が表されている。従軍先の蘇州で知り合った日本人女性リタについての評価にも、この「すり換える論理」は応用されている。

そのころリタには、新しい恋人がいた。ピアノが上手な海軍大尉は南の島に転戦して、新しい恋人は、軍医ということだった。軍医が幾人目の恋人なのか、わたしは関心がなかったが、「カルメンのような女」とZ社の上司はいった。そんな女を仕事の片腕にしている君のことを、Z社の恥だといっているよ、慎み給え、と忠告してくれた。二人の仲を疑っているのである。光栄ですな、彼女の恋人に選ばれて、とわたしはいった。(三五九頁)

「リタ」がZ社の上司に「カルメンのような女」と、将校に「危険とゼントルマンが好みのおようだし」(三六四頁)と言われているが、「戦争中、母国のために働いた。あるときは政治工作員らしき中国人につき、またあるときは上海の株式を牛耳る男の秘書になって、情報を海軍に送る。必要なら肉体の提供もあっただろう」(三七九頁)と「わたし」はリタに代わって、弁明している。主人公の「わたし」から見れば、国のために体を売り、命を犠牲にするまで「奮闘」していたリタは、「カルメンの女」とすり換えられたのである。

「庶民層にまで降りてきた狙撃事件は、人心の動揺を招く行為としては、効果があった。いつの時代もだが、歴史の流れは庶民の頭上で企てられて、創られていくものである。」(三一五頁) 上海での生活体験の中で、中国人の庶民層の生活を見て回り、従軍命令で体験した戦場でさらに戦争の「本質」についてこの身で知ることができた。「大

東亜共栄」の夢がすり換えられたことに気づき、「南京攻略に際して松井最高指揮官より南京防衛司令官唐生智に與へたる廿四時間期限附の投降勧告文」を読んだ「わたし」は、「与えられた二十四時間の生命の猶予。神でもない者が与えられた生命の期限。そのために四万二千人以上といわれる罪なき南京市民が虐殺された。すべて“庶民の頭上で企てられて、事は創られていく”のである」(三一九頁)と嘆いた。南京へ実状の調査に行っていたリタがノートに「親しくなると、妻も娘も日本兵に強姦された、家は焼かれた、敗残兵が隠れる恐れがあるといって、きびや麦の畑は焼き払われた、と訴える者が現れる」(三二九頁)と書き留めた。リタのメモはまさに歴史研究書に書いている南京事件の現実版であり、恐らく「わたし」やリタは南京事件のような「暴行」も見聞したのだろう。

一九四二年二月、「わたし」が翻訳して渡していた原稿が共産側のスパイに渡されたことで、日本の憲兵隊の注目を逃れるために、二回目の上海渡航が命じられた。この背景となったスパイ事件は、「日本を舞台にした今世紀最大の、事件になった」(三四三頁)という。日中戦争期間の出来事と参照して考察すれば、それは「ゾルゲ事件」と推測できる。

ゾルゲ事件とは、第二次世界大戦下リヒャルト・ゾルゲを頂点とするソ連のスパイ組織が日本国内で諜報活動および謀略活動を行っていたとして、一九四一年九月から翌年四月にかけて、その構成員が逮捕された事件である。この組織の中には、近衛内閣のブレイントラストであった元朝日新聞記者の尾崎秀実もいた。

この事件の主要人物である尾崎秀実は、戦中、元朝日新聞記者として上海に赴任して、そこで生活していた。尾崎秀実は、一九二六年に東京朝日新聞社に入社し、社会部、学芸部から大阪朝日新聞社に異動することとなり（このころ結婚）、一九二八年に特派員として中国・上海支局に赴任した。当時は、上海で革命運動が渦巻いて、中国は資

本主義列強の半植民地状態にあり、警察権も行政権も外国人が握っており、租界と呼ばれる外国人居留地が幅をきかせ、中国人民衆の生活は悲惨そのものであり、かつ彼らの憎しみは日本に向けられ「排日・排日貨」をスローガンに反帝・反戦の運動が繰り広げられていた時代である。尾崎秀実は、日本の中国に対する軍事的な政策を非難し、中国を解放しようとする革命運動家たちに共鳴するようになっていった。彼は、最初きわめて初歩的な左翼グループに入っていき、魯迅とも知り合い、魯迅の作品集の日本語訳も手がけた。ある人物に「非常に変わった女の新聞記者がいる」と紹介されて中国革命に深い共感を寄せるアグネス・スメドレーと出会い、意気投合するようになる。後年、尾崎秀実はその彼女の自伝小説『女一人 大地を行く』を「白川次郎」というペンネームで翻訳出版した。一九三〇年秋、この上海でスメドレーが尾崎秀実「アメリカの新聞記者ジョンソン」として紹介したのが、リヒャルト・ゾルゲであった。尾崎秀実、スメドレー、ゾルゲの三者が一堂に会した席で、尾崎秀実はそのゾルゲの魅力に魅きつけられたらしく、ゾルゲから中国の国内問題と日本の中国政策に関する情報提供の依頼を請け負った。彼らの協力関係は、一九三二年二月の朝日新聞社の命令によって尾崎が帰国するまで続いた。

尾崎秀実には、「愛国者」と「売国奴」という双方の評価がある。彼は、「東亜協同体」を構想し、中国共産党、コミンテルンとある面で連携し、一面では利用しつつ、日本の革新勢力を結集しようとしていた。尾崎秀実は、共産主義を標榜するコミュニストではなく、民族主義をふまえた東アジア社会の連繫、「東亜協同体」の実現をめざしたジャーナリスト、行動的思想家であった。ゾルゲとの交流もそのような意図の下で進められたものと思われる。しかも、満鉄調査部、近衛内閣と繋がりを持ち、日本の政治中枢にも入り込んで日中戦争の行方を「東亜協同体」の実現に向けて行動する尾崎秀実、体制内批判を行なう危険な人物として映った。彼を検挙した理由は、コミンテル

ンのスパイ・ゾルゲに通じたソ連への利敵行為による治安維持法違反である。

スパイ事件の疑いを逃れて「至急上海特派員」として再度上海に出された「わたし」は、一回目の特派員の生活で戦争の本質を認識していたため、海軍の「支那方面艦隊報道部嘱託兼任」となった時には「命令に従うことへの苦痛」を抱いたが、結果としては日本のために努めた。「残された時間を母国のために生きよう、とわたしは考えた。母国が国際社会の隅に追い詰められていく実感は、国の外にいる者にはよく伝わる。肌に感じる痛みと悲しみにおいて、わたしは愛国者になる」(三五六頁)と述べて、「わたし」は自分を愛国者たらしめる営為を選び取っている。

しかし、敗戦後、戦犯として裁かれることを逃れて、捕虜として中国国民政府のために働くことを選択した。「わたし」はこの戦争に自分にも責任があると認識し、上海に残ることを決めて「当時上海で活躍していた各社の記者たちは、日本と中国との和平を心から願っていた。危険に身を張って、和平運動に尽した記者もいたのである」(三六二頁)と語った。

このような新聞記者「わたし」という人物像には、「愛国者」と「売国奴」という二項対立に評価される尾崎秀実の影が映されていると考えられる。しかしながら、本人の「わたし」から見れば戦中・戦後の上海にいる行為はすべて「和平」のための努力にほかならない。当時の中国人新聞記者も「わたし」も最終理想を抱いて、「アジア、民族の共栄」のために、微力を捧げたつもりでいた。「売国奴」というより、国と個人との葛藤の中で、国に妥協してしまう無力さに「痛みと悲しみ」を抱いて生きていた「愛国者」という面の方が大きく捉えられるように、作者は読者に仕掛けている。

ところが、若いころ国のために行動していた自分のことについて、晩年を迎えた現在の「わたし」は、「ふり返って感動するのは、砂粒

にも満たない人間の行動や欲望が、国という大きな塊から発している点である。国は個人を喰うが、個人も国からしたたる甘い汁を、むさぼる。悲しいかな、個人は国の美醜と自分が一体であるのに、気がつかない。砂粒の欲望や悪事が積もって、国体を創造するのだが、そのなかには、わたし自身の欲も悪も加わっている。大東亜共栄の、真の共栄に気付く時期が、わたしは遅かったようである。」(三六二—三六三頁)と罪悪感と自責の心情を吐露している。このような認識を持つ「わたし」は作者の代弁者でもある。これは、林京子が戦時下、もし自分が「大人」だったら、戦争に免責されようもない罪があるとはっきり認識し、上海に居合わせた日本の国民として加害責任が問われるだろう、と想定していることからの語りと考えられる。

「五年ぶりにみる母国の人と風景を、わたしは傍観者の目で眺めていた。感動を呼ばない母国で、どう生きていけばよいのだろうか」、「わたしの上海時代、特派員の時は橘丸のなかで終了した。その後の人生もわたしの人生であるが、進むべき道を示す磁石をなくして、揺れるに任せている」(三八四頁)という「わたし」の語りには、作品のテーマ「予定時間」の解釈が含まれている。つまり、「大東亜共栄」という夢を戦争に託し、戦時下の上海へやってきて、大勢の人と出逢ったり、いろいろ体験したりすることによって「すり換えられた」真実を知らされ、夢は破滅し、国と個人との関係をどう処理していくか、葛藤が生じた。敗戦とともに、「祖国喪失」の問題が起こり、生きる予定のない「わたし」は、どう生きていけばよいのか分らなくなる。この意味で、『予定時間』のテーマはまさに黒古一夫が言う「見果てぬ夢」²⁹ そのとおりである。

長編の終章に「わたし」は次のような心情を吐露している。

この書を終わるに際して、宣撫した中国の新聞人たちに、彼らが生きながらえているなら、心からわたしは詫びたい。いつかど

こかで、と言葉を残して去っていった黄氏にも、胸一杯の思いを告げたいのである。中国との国交が回復したとき、わたしの心は上海へ飛んだ。パスポートをとり、上海行きの旅装が整えた。が、しかし、今日まで、わたしは上海にいけないでいる。せめてもの、謝罪である。(三八五頁)

新聞記者としての「わたし」の上海体験によって認識させられたのは、自分が加害者側にいることである。罪意識に駆られて、晩年を迎える「わたし」は謝罪の気持ちでいる。これは作者の投影でもあることは明らかである。とりわけ、戦後二回も上海の土を再び踏むことができた林京子にとっての上海という都市を通して考えた日本と中国の歴史の重さは想像に難くないだろう。

「わたし」にとっての上海体験は若いころの「大東亜共栄」という夢が現実的に果てぬままに終わってしまった。長編が書き終わろうとしたとき、「わたし」は一つの夢を見た。幻想の世界に一人の少女の姿が浮かんでくる。

重く暗い敗戦の群のなかで、少女の顔は闇を払って、輝いていた。少女は、母親が渡したみかんをむきはじめた。(中略) わたしは、おかっぱに包まれた少女の顔を、あきずに眺めた。こんな時に、こんな清純な、輝いた表情でいられる少女がまだ日本人のなかにいる。生きる予定のない敗戦の時のなかに、少女は一筋の希望を投げてくれた。できるならこの清純な少女によって、わたしは再生したい。もし願いが叶うならば、あと一度生きなおしてみたい。四十になろうとする俗な男の視線にも気付かずに、少女はみかんを食べ続けていた。(三八八頁)

『予定時間』のラストシーンと呼応する場面がその前の短篇「谷間」

の中に出ている。「谷間」の中で、主人公のなつこが母親と一緒に上海から引き揚げてくる叔母を出迎えにいき、そこで別れた夫の草男とはじめて出逢った。母親の袋に数個のみかんと塩むすびを入れてあった。そして別れようとしたとき、なつこは、みかンを草男にあげるように母親から指示を受けた。「草男は片手で招くように受け、ありがとう、あったかいよ、とみかンを頬にあててみせる」³⁰、というシーンであった。その後二人は結婚し、そして離婚した。草男が家出する前のなつこ宛の手紙に「いつか僕は、君との結婚生活は被爆者との生活に他ならなかったといった。お互いに感情的であったにせよ、あの言葉は恥じている。(略)しかし全くの虚偽ではない。僕も君の八月九日に汚染されてしまっている。特に僕の息子を通じてね。僕も人の子の親だから、九日への関心も心配も君に劣らないつもりだ。」³¹と書かれている。『予定時間』の中に現れてきた引き揚げ船で出逢った少女がみかンをむきはじめる行為は、幻想の世界で掴んだ明るくて暖かいイメージが「わたし」に微かな希望を与え、戦後生活に対する「わたし」の期待とも言えるだろう。しかし、『予定時間』の「わたし」は「谷間」の草男と同一人物と仮定すれば、現実生活で少女と縁があったが、結局その縁を無くすことになった。被爆者である少女は、戦争の産物とも言える原爆に遭い、恐怖と不安の中を生きている。少女と結婚した「わたし」まで「汚染」されてしまった。つまり、戦争の硝煙は、戦後でも「わたし」の中も少女の中もずっと消えぬままであった。「少女と巡り逢うことなく、わたしの時間は終わろうとしている。あの一筋の光はわたしの人生計画にはなかった敗戦後の時のなかに、しばしば夢となって現われてくるのである。現実を追い続けた特派員の終わりの時に、一瞬のきらめきを残して」(三八八頁)と締めくくりに示すように、結果としては、救済してくれるはずの少女は「わたし」を救うことができなかった。一見「予定調和」の末尾だが、そこに予定が立たない不調和が潜んでいるのである。

おわりに

『予定時間』における新聞記者の戦中・戦後の上海体験は、少女であるがゆえに子供の視点で見えなかった、考えなかったことを、大人の「わたし」を通して追体験したものである。この追体験で、とりわけ戦争の渦中で生きた大人に共通する個人と国との間に生じる葛藤、戦時下に上海に居合わせた人の生活の実態が映し出された。タイトルどおり、日本人の立場に立って、敗戦とともに、国へ託した夢が破滅し、戦後を生きる時間が予定されていないと作中繰り返されている。これは武田泰淳の『上海の蜩』や堀田善衛の『齒車』などの小説のテーマとなっている「祖国喪失」の問題と共通している。

「わたし」の老後「懺悔記」には、占領側の少国民として占領地にいたことを罪として考えるようになった作者の心境が込められている。『ミッシェルの口紅』、『上海』、『予定時間』、いわゆる「上海もの」の三部作を関連づけてみると、光の多い少女の上海に執着しながらも、三十六年ぶりの上海再訪で上海の今昔の中で子供時代の「影」が喚起され、戦争について考え直す機会を得た林京子の変化が見えてくる。言い換えれば、戦後二回の上海再訪を含む多くの人生経験および時間の隔たりが、大人として、上海、ひいては日本と中国の歴史を見るときの客観的な眼差しを作家の林京子に持たせた。それは『予定時間』の創作によって表れたのである。

一方、作品では、アジア・太平洋戦争の戦況や国際情勢の推移、あるいは主人公「わたし」が自ら関与した政治的・社会的事件も、単身赴任でありながら時にはそばに来る妻との生活も、上海滞在中、知り合いになった日本人女性リタとの「ロマン史」も、「わたし」の語りの中に含まれている。換言すれば、『予定時間』は、新聞記者の戦時下上海での冒険物語に恋愛物語が織り交ぜられている。別れた夫・林俊夫とおぼしき人物のイメージを、これまで「女たらし」から「優等

生ぶり」に好転させたことに、林俊夫に対しての林京子の感情変化が読み取れる。林京子は、恐らく林俊夫が残した手記類の資料から彼の上海時代を知ることができただろうが、「いい争って、草男が谷間の家を去るまでの一年は、憎悪を沈澱させたようです」³²と「谷間」の語りにあるように、時間の流れにつれて、林京子は作家として、林俊夫の新聞記者としての過去を直視することができたと思われる。さらに、作中、室伏クララがモデルとなっているリタという女性における「才女」と「カルメンのような女」と誤解されがちな二面性が描出された。自分自身が一つの信念を持って生きているつもりであったリタは、われわれ読者から見れば、最終的にたらい回しにされ、悲劇的な人生を送った存在というしかない。個人が時代にどのように巻き込まれてゆくか、とくにその中の女性という存在を描くことは、『ミッシェルの口紅』にも示された作家として女性被爆者としての林京子の関心のありどころである。上海を題材にした林京子の作品群において、注目されるべき『予定時間』の特異性、また林京子にとって『予定時間』の重要性は、まさにここにあると言って良い。

〔注〕

- 1 第一篇から第六篇は、それぞれ雑誌『海』の一九七九年一月号、三月号、五月号、七月号、九月号、十一月号に連載し、第七篇は、雑誌『婦人公論』一九七九年十二月臨時増刊号に発表。一九八〇年二月二〇日、中央公論社より刊行。以後各種の文庫本やアンソロジーに収録。
- 2 雑誌『海』の一九八二年六月号から八三年三月号まで連載（全十回）。一九八三年五月二〇日、中央公論社より刊行。以後各種の文庫本やアンソロジーに収録。
- 3 雑誌『群像』（一九九八年六月号）に一挙発表。一九九八年一月五日、講談社より単行本。『予定時間』の初出時間に関しては、『予定時間』が収録された『林京子全集 第二巻』の「解題」に「一九九七年」と記されているが、『林京子全集 第八巻』の「著作（初出）目録」に「一九九八年」と書かれている。筆者が『群像』を確認したところで、初出は「一九九八年」である。

- 4 川村湊「毎日新聞 一九九八年五月二六日付夕刊」、『文芸時評 1993 - 2007』、水声社、二〇〇八年七月、二二三頁。
- 5 林京子、聞き手：伊藤成彦「敗戦後の日本人の生き方——新作『予定時間』をめぐって」、『文学時標』第一二一号、一九九八年三月二五日。
- 6 黒古一夫『林京子論——「ナガサキ」・上海・アメリカ』、日本図書センター、二〇〇七年六月、一三二頁。
- 7 渡邊澄子 スリアーノ・マヌエラ『林京子 人と文学』勉誠出版、二〇〇九年六月、八六頁。
- 8 本稿において、作品引用は、特別に明記したもの以外はすべて『林京子全集 第二巻』（日本図書センター、二〇〇五年）によるものである。引用するにあたり、旧仮名遣いを現在の仮名遣いに変更した。頁数は引用内容の後に入れることにする。
- 9 林京子著、聞き手：島村輝『被爆を生きて——作品と生涯を語る』、岩波書店、二〇一一年七月、二三頁。
- 10 堀田善衛『上海にて』、筑摩書房、一九五九年七月。
- 11 堀田善衛著、紅野謙介編『堀田善衛 上海日記：滬上天下一九四五』、集英社、二〇〇八年十一月。
- 12 堀田善衛著、同書、一九頁を参照。
- 13 大橋毅彦「＜資料紹介＞室伏クララのために」、『甲南国文』第五〇号、甲南女子大学日本語日本文学会、二〇〇三年三月、二五頁。室伏クララの亡くなった年は「一九四七年」と書いてあるが、「一九四八年上海で客死した室伏高信氏の令嬢」（堀田善衛『上海にて』、前掲書、一〇九頁）、「一九四八年早春、神経衰弱で、自殺同様の死に方で、上海で客死した」（『乱世の文学者』、『堀田善衛全集 第十二巻』、筑摩書房、一九七五年、一三三—一三五頁）と一致していない。堀田善衛と室伏クララの交友関係から考えると、「一九四八年」である説が正確である可能性は高い。
- 14 大橋毅彦、同書、二五頁。
- 15 室伏高信『追放記——人生逍遙——』、青年社、一九五一年四月第二版発行、九四頁。
- 16 室伏高信、同書、九五頁。原文「その頃彼女は恋愛をおぼえていたようであった。支那語をおしえていた何がしという先生と恋仲になり、しょっちゅうその人と行ききをしていたらしいのである。その先生には夫人があって、望ましいことでない（略）」。
- 17 室伏高信、同書、九六頁を参照。原文「彼女は、中国語にだけは特別に興味

をおぼえていたと見えて、気まぐれとわがままな性格にも拘らず、これだけはたえず勉強をつづけていたようで、進境のほども相当に見え、いつの間にか、内山の支店で中国本を見つけて読むようにもなった。(略) それ以来彼女は、中国語というよりは、中国文学の研究に興味をもつようになり、結局中国に行ってみたいということになった。幸い中国には私自身にいく人かの知人があるので、昭和十五年の十月に、中国に送り出すこととなったのである」。

- 18 室伏高信、同書、一〇〇頁。
- 19 『林京子全集 第三巻』、日本図書センター、二〇〇五年六月、三七九頁。
- 20 黒古一夫、前掲書、一三三頁。
- 21 黒古一夫、前掲書、一四〇頁。
- 22 黒古一夫、前掲書、一四七頁。
- 23 渡邊澄子 スリアーノ・マヌエラ、前掲書、一三〇—一三二頁。
- 24 林京子著、聞き手・島村輝、前掲書、二三頁。
- 25 林京子著、聞き手・島村輝、前掲書、四六頁。
- 26 林京子「華やかなうたげ」特別寄稿、堀田善衛著 紅野謙介編『堀田善衛 上海日記：滬上天下一九四五』、前掲書、四三〇頁。
- 27 ゴルゲ事件に関して、小尾俊人編『現代史資料 (1) ゴルゲ事件 1』(みすず書房、一九六二年八月)、みすず書房編集部編『ゴルゲの見た日本』(みすず書房、二〇〇三年六月) 参照。
- 28 黒古一夫、前掲書、一四八頁。
- 29 『林京子全集 第三巻』、前掲書、三七九頁。
- 30 『林京子全集 第三巻』、前掲書、四四〇頁。
- 31 『林京子全集 第三巻』、前掲書、四四六頁。